

特集 「編集委員今年の抱負 2013」

人と人のつながりを科学する

大原 剛三 青山学院大学理工学部



昨年から（この原稿を書いている時点では今年から）知識ベースシステム研究会の幹事を務めることになり、先に開催された合同研究会にて担当回を無事に（？）終えることができた。いろいろとご無理をお願いした関係諸氏、サポートしていただいた実行委員、事務局の方々、また聴講して下さった方々にはこの場を借りて御礼を申し上げたい。段取りの悪さが目についたかと思うが、ご容赦いただければ幸いである。

さて、その研究会では「Web 情報処理」というテーマを掲げた。いささか使い古された感が否めない言葉ではあるが、Web を対象としたさまざまな知識処理を広く網羅するという意味では、やはりこの言葉が一番しっくりくるように思う。Web 上のブログ記事やレビュー記事を対象としたテキスト・Web マイニングから、Facebook や twitter に代表される SNS を対象としたソーシャルネットワーク分析まで、Web 上に存在する情報に対する多様な取組みをカバーする言葉である。かく言う自分も、近年はインターネット上のソーシャルネットワークを主な研究対象としている。それがこのテーマを設定した理由の一つでもある。

実際のところ、ここ数年における SNS の爆発的な普及により、日常的なコミュニケーションや情報発信のスタイルは大きく変化している。特に若い世代ほどその傾向は顕著であり、職業柄、学生と接する機会が多いが、彼らを見ていると強くそう感じる。研究室の打合せに來ていない学生についてほかの学生に何か知っているかと尋ねると、「1時間前に“今向かっている”とつぶやいていたので、もうすぐ来ると思います」との返事が返ってくる。ほとんどの学生が twitter のアカウントをもっている最近では、このようなやり取りが当たり前のようにになっているが、一昔前ではこのような“生存確認”は考えられなかった。自分の“今”をつぶやき、それを他者と共有することで、自分の存在証明をしているようなものである。先のようなシチュエーションでは、自分の状況をつぶやいておけば、それに気付いた友人が機転を利かせて何らかのサポートをしてくれるかもしれない。その反面、迂闊なことをつぶやいてしまえば、信用を大きく損なうことや、いわゆる「炎上」という事態に陥ることもあり得る。ただ、就職活動やインターンシップに行く時期になると、それまでオープンにしていた twitter のアカウントを非公開にするという話を学生から聞くと、彼らなりに多少はリスク管理に気を配っているようではある。

上記は比較的“近距離”な情報共有の例であるが、ソーシャルメディア上に展開される人と人のつながり、いわゆるソーシャルネットワークというものを介して“口コミ”で伝わる情報は、インターネットの特性上、短時間で広範囲に拡散し得るため、そうして拡散した情報が社会全体に大きな影響を与えることも多々ある。アラブの春以降の大規模な社会運動、デモ活動では、Facebook や twitter などのソーシャルメディアがそれらの活動に関する情報の拡散手段として重要な役割を果たしていることはよく知られている。また、東日本大震災では、twitter が安否確認などの情報交換に用いられ、災害時の情報インフラとして改めて注目されたことは記憶に新しい。その一方で、東日本大震災では悪意のあるなしかかわらずいくつかのデマ情報が拡散され、少なからず混乱を招いたのも事実である。

このように社会全体に与えるインパクトの大きさから、ソーシャルネットワーク分析に関する関心は今なお高い。ただ、一口にソーシャルネットワーク分析といっても、共通の興味・価値観を共有するグループを見つけ出すコミュニティ抽出やリンク予測、誰がどの程度の情報拡散力をもっているかという影響度分析、ソーシャルネットワーク上での意見形成のモデリングなどをはじめとして実にさまざまな切り口がある。私自身、この研究に携わるようになってまだ日は浅いが、やってみるといろいろな分野との関連性に気付かされる。そもそも、基本的な情報伝搬モデルは感染症の伝染モデルと同じである。つまり、ネットワークを介して人から人へと情報が“伝染”すると考えるのである。また、意見形成の基本的なモデルは、周りの人の意見を参考に自分の意見を決めるという点で、推薦システムにおける協調フィルタリングと共通するところがあり興味深い。

前置きが長くなったが、今年の抱負としてはこのようなソーシャルネットワークに関する研究にもう少し腰を落ち着けて取り組んでいきたいと思う。そして最後に、今年も合同研究会での知識ベースシステム研究会の担当を拝命したので、その宣伝をさせていただこうと思う。年間実施回数が昨年と同様であれば、合同研究会での知識ベースシステム研究会は第 100 回を迎えることになる。テーマは未定であるが、読者諸氏にはこの記念すべき研究会での発表をぜひとも検討していただければ幸いである。この研究会を成功させることが、自分にとってのもう一つの今年の抱負である。